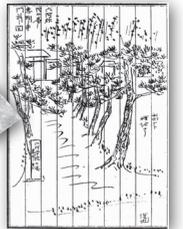
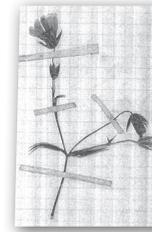


庭の荷風の庭



したたかな“理系感覚”を持つ作家・荷風の
文芸世界を訪ねる

訪問者 坂崎 重盛

霜除けの園丁軽んずおかめ笹

◎

前回、『中央公論』誌上で、半藤一利・嵐山光三郎両氏と永井荷風をテーマとした鼎談を行ったが、そのときの雑誌の切り抜きが見当たらず、何年前からだったか不明と記した。

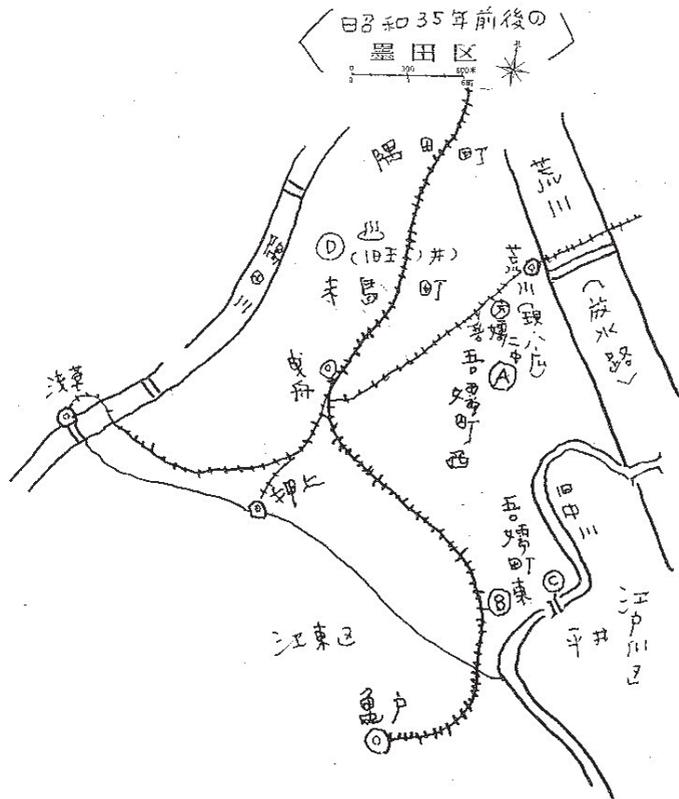
遅ればせながらスマホを持たざるを得なくなり、△十歳からの手習い、「雑誌中央公論」「バックナンバ―」「永井荷風特集」と三題断ふうに三つのキーワードで検索してゆくと、おや、ありました！

「〈没後五〇年〉不良老人・永井荷風という晩年」というタイトルの特集だった。荷風が本八幡の一室で孤独死したのは一九五九（昭和三十四）年の四月。没後五十年ということは二〇〇九年だから、あれからもう十年以上経ったのか。

この特集の「不良老人」というキャッチワードは、半藤・嵐山両氏にふさわしく、こちらはといえば不良というほどの気概もなく、ただ毎日を興味本位、面白おかしく軟弱に送りたいほうなので、むしろ「道楽」を旨とするほうかな、と思いつつ、その座談にお付き合いさせていただいた。

思えば、半藤氏とぼくは、墨田区も同じ町内の育ち。かつての町名でいえば、「吾嬭町」。

以前、墨田区が企画した講演会でお目にかかったとき、半藤氏、「坂崎さんも吾嬭町の出でしょ。やっぱ



り、こんにやく稲荷で遊んだくち？」と、お声をかけていただいた。吾嬭町はけっこう広いエリアで、半藤さんは北側・玉ノ井に近く、ぼくは南側で川幅の狭い旧中川、平井橋を渡れば江戸川区という位置で育ったので、「子どもはそんな遠くまでノシて行きませんよ」などと笑って答えた記憶がある。

それはさておき、この向島育ちの半藤氏に荷風にかかわる忘れがたい二著がある。ぼくはちくま文庫で読んだのだが、『荷風さんの昭和』と『荷風さんの戦後』。

『荷風さんの昭和』では、とくに終章に近い「第十章 月すみだ川の秋暮れて」の「つばたれ下る古帽子」の項が嬉しかった。

ここでの一文、まず「わが漱石先生は生涯に二千四百三十一句つくれた」と和田利男氏の著作から引用しつつ、すぐに荷風の句作に言及する。

- ① 半藤氏が子どものころ遊んだ吾嬭町・こんにやく稲荷の場所
- ② 同じく吾嬭町・筆者の育ったエリア（現・立花）
- ③ 半藤少年が東京空襲で死にかけた旧中川・平井橋
- ④ 『遷東綺譚』の舞台となった旧玉ノ井